

聖書：ルカ 23：39～43

説教題：きょう、パラダイスに

日時：2013年3月3日

イエス様と一緒に二人の犯罪人が十字架につけられていました。一人はイエス様の右に、一人は左に。この二人は一緒に十字架につけられ、後は同じ運命をたどるように思われました。しかしこの二人に大きな違いが現れます。一人は救われ、もう一人は救われない。同じ出来事を経験し、同じ状況を見、同じ言葉を聞き続けた二人なのに、一人だけが信仰に入り、もう一人はそうでない状態にとどまる。果たして私たちはこのどっちの人間に当たるのだろうか、と問われる内容にもなっています。

まず犯罪人の一人がイエス様に悪口を言います。39節：「十字架にかけられていた犯罪人のひとりにはイエスに悪口を言い、『あなたはキリストではないか。自分と私たちを救え』と言った。」これは、その前に出て来た人々の言葉と同じです。35節：「もし、神のキリストで、選ばれた者なら、自分を救ってみろ。」37節：「ユダヤ人の王なら、自分を救え。」十字架上の犯罪人は、自分が置かれた状況を受け入れられず、耐えがたい時間を過ごしていたでしょう。そんな中、人々から集中的にあざけられている人を見て、その人を周りと一緒にあって侮辱し、見下すことによって、何とか自分を保とうとしたのでしょう。

ところがもう一方の犯罪人は、違う態度を取ります。実は彼も最初はイエス様をののしっていたことが他の福音書から分かります。マタイ 27章 44節：「イエスといっしょに十字架につけられた強盗どもも、同じようにイエスをののしった。」マルコ 15章 32節：「イエスといっしょに十字架につけられた者たちもイエスをののしった。」ところが時間が経つうちに、一人の犯罪人の心には変化が起こっていたのです。そして彼はもう一人の方に向かって、こう言います。40節：「ところが、もうひとりのほうが答えて、彼をたしなめて言った。『おまえは神をも恐れないのか。おまえも同じ刑罰を受けているではないか。』」

ここで面白いのは、犯罪人である彼が、「おまえは神をも恐れないのか」と言っていることです。もし彼が本当に神を恐れていたなら、十字架につけられるような罪は犯さなかったでしょう。しかし彼は今や他の人を論ずことができるほど、神を恐れる心を持つ状態に変わっていた。それはやはり、十字架上でイエス様の姿を見続けたことによるでしょう。彼は 41節で言います。「われわれは、自分のしたことの報いを受けているのだからあたりまえだ。だがこの方は、悪いことは何もしなかったのだ。」彼はイエス様がピラトによって繰り返し、「この人に罪はない」と宣言されていたのを聞いていたかもしれません。また十字架に上げられ、人々からののしられても、全く罵り返さなかった姿を見て来ました。それどころか、イエス様はご自分を十字架につけ、罵る者たちのために祈られました。この犯罪人は、そのイエス様の姿と振る舞いを見ている内に、この方は何と自分たちと全く異なる次元に生きているお方か、ということをおぼろげに思わなかったのです。一言で言って驚くべきこの方のきよさを肌で感じたのです。そしてその時、自分がいかに罪深い者であって、このような報いを受けて当然の者であるかを深く悟るに至ったのです。

その彼は言います。42 節：「そして言った。『イエスさま。あなたの御国の位にお着きになるときは、わたしを思い出してください。』」ここで非常に奇しいことはこのことです。彼は十字架上でボロボロの姿となり、血を流しているイエス様を見て、「イエス様、あなたは御国の位につく王子です！」と告白していることです。肉の目で見ると、どこにも王様らしい姿はありません。ただみじめで、蔑みたくするような姿しかなかったのです。ところがこの犯罪人は、十字架にかかっているイエス様をまことの王と告白しています。ここにイエス様の栄光を見ていたのです！そして彼は、イエス様はこの十字架の死で終わりになる方ではないと見ています。ですから「御国の位にお着きになるときは」と言っています。

そしてさらにイエス様に向かって「わたしを思い出してください。」と言いました。これも驚くべき言葉です。彼はイエス様のきよさに触れました。そして同時に自分自身の罪深さをも悟りました。そんな自分がイエス様に何かをお願いしても、相手にされるはずがない、自分にそんな資格はない、と彼が考えてもおかしくありません。しかし彼がこの願いを述べたのは、彼がイエス様のこの上ないきよさと同時に、この方のあわれみの大きさをも見て取ったことを意味します。罵られても罵り返さず、かえって敵のためにとりなしの祈りをささげておられた姿を見て、この方においてとてつもない神の憐れみの世界がここに存在していることを彼は見たのです。それで、こんな私でも何らかのあわれみをいただくことができたなら、と彼は祈り願ったのです。

そんな彼にイエス様は言われました。43 節：「イエスは、彼に言われた。『まことに、あなたに告げます。あなたはきょう、わたしとともにパラダイスにいます。』」イエス様はここで彼に救いを与えておられます。彼は今の今まで悪の道を歩んで来た人であり、ふさわしい報いを受け取って後は死ぬこと以外何も残されていない人です。しかしその彼に何とここで救いが与えられた！ここに聖書が語る救いが象徴的に示されています。この犯罪人は、救われるために良い行ないは何もして来ませんでしたし、これからもそれはできません。両手両足を釘づけにされていますから、したくてももうできないのです。なのにそんな彼がなぜ救いにあずかることができるのか。それはただイエス様の功によってです。イエス様は罪がないのに、こうして十字架にかかっておられたのは、罪人の負債を肩代わりするためです。イエス様がそのことを、この私のためにしてくださったと信じ、そのイエス様により頼むだけで、どんな人でも救われる。この犯罪人でも OK なのです。ですからたとえどんなにこれまで罪を犯して来た人であっても、イエス様はその罪を赦し、救いに導き入れることができるのです。

イエス様の言葉にもう少し注目したいと思います。イエス様はここで、あなたは「パラダイスに」います、と言われました。このパラダイスという言葉はペルシャ語から入って来た言葉で、もともとは王様の庭、囲いのある広大な庭園を意味しました。王様が散歩したり、眺めたり、楽しんだりするところですから、それはとても美しく、素晴らしい場所だろうということは想像できます。しかし、囲いの中に自由に入ることはできません。ある人は、この囲いは高い塀を意味していると言います。とすると、のぞき見することすらできないということになります。それだけに一層、そこはどんなに素敵なおとろろか、と思いを巡らし、憧れ慕うことしかできない。興味深いのは、ギリシャ語訳の旧約聖書で、このパラダイスという言葉は、あのエデンの園を指す際に使われていることです。今日の私たちもエデンの園を垣間見ること

はできません。創世記を読みますと、そこはどんなに素晴らしいところだったでしょうか、と思います。しかし、ユダヤ人の信仰の中には、神が終わりの日に、そのパラダイスへ救いの民を導き入れて下さるといふ信仰が生きていました。イザヤ書 51 章 3 節：「まことに主はシオンを慰め、そのすべての廃墟を慰めて、その荒野をエデンのようにし、その砂漠を主の園のようにする。そこには楽しみと喜び、感謝と歌声がある。」 この中の「園」という部分に、あの「パラダイス」という言葉が使われています。十字架上の犯罪人は、あの夢にしか思い描いたことのない素晴らしい主の庭、パラダイスに住むことができる、とイエス様に言われたのです。

またイエス様は「わたしとともに、そこにいる」と言われました。イエス様を知った人にとっては、イエス様が一緒でなければ、そこがどんなに素晴らしい場所でも、天国とは言えません。尊いのちをささげるほどに私たちを愛し、導いてくださるイエス様が共にいてくださってこそ、そこは私たちにとって最も慰めと喜びに満ちた世界となります。

またイエス様は「きょう」と言われました。私たちは死んだ後、魂も眠りの状態に入って、やがての日までの間、無意識状態になるのではないのです。確かに肉体について聖書は「眠り」という表現を使っています。これはやがて起き上がる日が来ることを前提にした言い方です。しかし魂について言えば、信じた人は死後直ちに幸いな状態に入ります。16 章で見た「金持ちと貧乏人ラザロのたとえ」においても、まだ最後の審判の日が来ていない時、貧乏人ラザロはすでに祝福の状態に生き始めており、逆に金持ちは恐ろしい苦しみの状態を味わい始めていました。もちろんやがての肉体が復活する日に、キリスト教の救いは最終的な形で現れます。しかし主にあつて救いを頂いた人は、地上の死の直後から、天国の前段階、いやほとんど天国と言っても良いような状態に生かされるのです。ウェストミンスター小教理問答 37 の答え：「信者の靈魂は、死の時、全くきよくされ、直ちに栄光に入ります。」

そしてイエス様はこのことを「まことに、あなたに告げます。」という言葉をもって語られました。これはイエス様が重大なことを語られる際の表現です。それほど確かな言葉として、私たちが確信を持ってより頼むべき言葉として語られているのです。

これはこの犯罪人の願いを何とはるかに上回る、信じられないような言葉だったのでしょうか。自分は人生を逆さまに生きて来た者なのに、ただイエス様の一方的な恵みとあわれみによって、こんなにも素晴らしい祝福を頂く者とされた。彼はこの言葉にどんなに深い慰めと希望を頂いて、地上に残された時間を生き、また死んで行ったことでしょうか。間もなく彼は死ぬでしょうが、それはパラダイスへの入口なのです。悲しいことではもはやないのです。

私たちはこの犯罪人が置かれていた状態と自分は違う、と思うかもしれません。私たちは法を犯して、死刑にされるという形で死ぬのではないかもしれませんが。しかし私たちにも死ぬ日が来るという点では同じです。その私たちは、死の準備ができていますでしょうか。死んだ後、自分がどこに行くか知っているでしょうか。時々、この犯罪人の一人は人生の一番最後のギリギリの時に救われたから、私もその時で良い、と言う人がいます。しかし私たちが思うべきは、もう一人の方は救われなかったということです。最後の時間にみんなが信じるのではない。むしろ益々心をかたくなにして、滅びの道を進んだ人もいたのです。ですから不必要に時間を延ばすことはとても危険です。自分では計画しているつもりであっても、すなわち人生の最後に信じようと思っても、その時に心から信じることができない。信じたいと思っても、そのよう

に自分の心が動かない。固くなって行く。あるいはそんなことを考える時間的余裕も、精神的余裕もない仕方で、突然死が襲いかかって来て、あ〜大事な決断をしてない状態で自分の命が終わってしまう、という取り返しのつかない事態に至るかもしれません。ですからイエス様を信じることを先延ばしにすべきではないのです。むしろ一日も早く、この素晴らしい約束を自分のものとして頂くことに勝る喜びと平安はないのです。

自分の罪ゆえに、たださばきのみがふさわしかった私たち。しかし私たちは自らの罪を認め、それを告白し、イエス様により頼むだけで救いの恵みにあずかることができます。イエス様はそのために必要となるすべての代価を、罪のないご自身を身代わりにささげることによって払ってくださいました。そのイエス様によりすがる者に、イエス様は素晴らしい約束をくださっています。私たちがいつ死の日を迎えても、「きょう、あなたはわたしとともにパラダイスにいます」と言ってくださる。私たちはこの言葉を頂いて、死の恐れから解放された人生を歩み、またいつか死が訪れても、「きょう、今から、パラダイスに」との御言葉に慰めを頂いて、その先にあるさらに幸いな歩みへと、主を賛美しつつ歩むことができるのです。